



栄耀栄華



川崎ゆきお

咲き誇る花もいつかは散る。咲き誇っていない花は、散ったことさえ分からないわけではないが、目立たないので、分かりにくい。栄えたものはいずれ亡びる。それは人には寿命があるため、否が応でも去らなければいけない。そして、後継者がしっかりしていると、さらにその栄華は続くかもしれないが、これも三代目、四代目となると、もう分からなくなる。当然時流があり、そこから離れてしまうと、存在価値も薄くなり、影も薄くなる。

というような人の世の儚さを噛みしめた坂上は、栄耀栄華を極めるのは損ではないかと思うようになった。ただ、それを噛みしめるだけの体験はなく、物の本や、人の行いを見て感じただけのことだが、これを教訓とした。

「ほう。それは平家物語でも読みましたか」

「いえいえ、咲く花の華やかさとは裏腹に、それが枯れて散る様を見ていると、そう感じたのです。それならいっそのこと先回りをして、枯れ尾花を目指す方が得策かと」

枯れ尾花とはススキの枯れたような状態だ。おれは川原の枯れススキ……と退廃的な唄が流行った時代もあった。

「しかし坂上さん。あなたそれほど出世もしていないし、財を蓄えているわけでもないでしょ。そんなことを考える以前の問題で躓いているように、私には思われるのですがね。つまり捕らぬ狸の皮算用の問題です。まずは狸の皮を捕らないと」

「しかし、狸の皮を捕って良い身分になったとします。その後が心配なのです。皮を捕り続けなといけないうし、皮の人气が今一つ下がったとき、落ちていくでしょ」

「捕りもしないのに落ちることを心配しているのですか」

「そうです」

「それを取り越し苦労と言います。分かりますね」

「しかし、やる気が失せてしまいます。先の先まで考えると。結果的に枯れススキになるのですたら」

「だったら、狸の皮をあまり捕らないことですよ」

「え」

「欲を出して皮を捕るからいけないのでしょ。ほどほどならそれほどいい身分にはならないはず」

「そうですねえ」

「簡単なことですよ」

「はい」

「しかし坂上さん。あなたまだ一枚も皮を捕ってませんよ。だから、栄耀栄華の入り口にさえ立っておられない」

「そうですねえ」

「だから、坂上さん。あなた一切そんな心配をする必要はないと思います」

「それを聞いて安心しました」

「その心配はないから、狸の皮捕りに精を出しなさい」

「はい、そうします」

了